

郡上おどりの継承を考える

足立重和

Considering the Inheritance of Gujo Bon Festival Dance

Shigekazu ADACHI

本稿は、2010年10月22日に岐阜県郡上市八幡町（以下、郡上八幡）の「流響の里」にて行われた公開講演会で話した内容をまとめたものです⁽¹⁾。その講演会は、郡上八幡に関する拙著（足立、2010）の出版を記念して、地元の発起人が主催者となって開催されました。主催者側から与えられた演題は「郡上おどりの社会学的分析と継承への提言」であり、当日は70名ほどの地元の方々の参加がありました。

いつもフィールドワークにおいて地元の方々から与えてもらってばかりで、何もお返しするものがなく困っていた私に、期せずして地元講演というかたちで、ささやかではありますがお返しする機会を与えられたのは、フィールドワーカーとして幸運でありました。そのような経緯をもつため、本稿は、話し言葉になっています。話し言葉であるため、学術論文のような厳密性を欠いていますが、一フィールドワーカーが、これまでお世話になったフィールドにおいて研究成果をどれだけわかりやすく還元できるか、というひとつのかたちとして記録にとどめたいと考え、本紀要を活用させていただきました。

キーワード：郡上おどり、地元の楽しみ、風情、まちづくり、高信頼社会

1. 地元の踊り離れと観光客のふるまい

郡上おどりということでお題をいただきました。こういう仕事をしておりますと、学生を大学の外に連れ出して、実際に“社会”を学ばせる機会が多ございます。そこで私どもは、ほぼ毎年、夏休みになると郡上八幡でお世話になっていて、町を散策しながら、ときに地元の方にお話を伺いながら、学ばせていただいているんです⁽²⁾。そんなとき、うまい具合に郡上おどりの日とちがち合うことがあって、当然学生たちといっしょによく踊るんです。学生たちですが、さすが若いだけのことはあって、一回も踊ったことがなくても、踊っているうちにだんだん上達して踊りが揃ってくるんですね。そうすると、学生たちも楽しくなって、「先生、何かこう、手足が揃ってくると、楽しいですね」と盛り上がってくるんです。「そうやろー」なんて言いながら、手はこう、足はこうと、こっちも指導に熱が入ります。

そうやって盛り上がっているときに、今年（2010年）のことなんですが、ふとある学生が、この学生は女性なのですが、「先生、ところで地元の人は（この会場で）どれくらい踊っているんですか？」とフツと尋ねてくるんです。「うーん、僕の見え限り、ほとんどヨソの観光客やねえ～」と言うと、急に顔色が変わって「えーショックですう～」って言うんですよ。さて、この学生の反応って、何なんでしょうか。もしかしたら今どきの旅番組の見すぎかもしれません。よくありますよね、あの芸能人が観光地に行って、そこのおいしいもんや見所を紹介して、最後は地元の郷土芸能にふれて、地元の素人の案内役とともに全国的に有名な芸能人が地元との交流を果たす、というアレですよ。そんな番組を見すぎていて、その落差から「えー、イメージと違う」と言っているのかもしれない。

ただ、そうじゃないところも、けっこうあるように思うんです。実際この私も、この学生と同じ反応だったんですね。今からちょうど13年前、平成9年、1997年から私は本格的に社会学のテーマとして郡上おどりの保存や継承にかかわったのですが、その頃集中的に地元の方々に聞き取りをしていると、皆さん口々に「地元の踊り離れ」を口にするんですね。その翌年1998年、実際踊りシーズン全日程参加してみると、確かにそうなんです。とくに印象に残ったのは、当日の踊りの主催者である各自治会の方々なんかは、はじめの準備にかかわって、いざ踊りの本番が始まると、いったん家に引っ込んで、食事してはるんですね。それで、ビールなんか飲みながら、こう野球中継見て、やがて踊りの終了時間になった頃「お、そろそろか～」ってなんて感じで、地元の方々が踊りの後片付けをするんですね。あれ、踊らないの？って感じですよ。自分たちの祭り・踊りなのに、ですね。

それから、だいたい1998～2004年くらいまで、けっこうべったりと踊り日程に参加できているんですが、こんな調子でして、具体的に踊りの輪を見ていると、観光客どうして踊りながらおしゃべりして、まったく地元の方々と交わろうとすることなく、内輪だけで盛り上がる「内輪ウケ」

のようなグループが見られたり、たとえば、「三百」(＝郡上おどり10種目あるうちの1種目)なんか、はじめの始まりの手がありますよね、あれが、こっちの輪でパンと手を叩いて踊っていると、輪の向こうのほうでパンと音がする、つまり一つの輪で二分するかたちで手が完全にズレていて、その後慌てて、地元の「郡上おどり保存会」(以下、「保存会」)の方々や踊りファンの常連さんたちが軌道修正したりするんです。かと思いきや、仲のいい複数の家族連れが、もちろん観光客ですね、自分たちの揃いの浴衣を着て、大きな輪とは別に、空き缶なんかを、あるいは、自分たちの幼い子どもが乗ったベビーカーなんかを真ん中に置いて、その周りを自分たちだけで踊っているんです。「保存会」のお囃子は、まるでBGMなんですね。

確かに、このように、地元の輪のなかにながら、内輪ウケしている観光客のふるまいは、別に悪くない。注意するほどでもない。しかし、どこか違和感があるんですね。その違和感にこだわると、今から申しますような問いかけが私のなかからフツフツと湧いてくるんです。それは、たしかに郡上おどりは現在郡上八幡の大切な観光資源なんです、観光客という“お客様”だったら、何してもいいんでしょうか？　そもそも盆踊りは何のためにあるんでしょうか？　いったい盆踊りって誰のものなんんでしょうか？

2. 社会学から見た郡上おどりの歴史

いったいどうしてこのようになってしまったんでしょうか？　このように問うと、「誰某が悪い」「ある団体、グループが悪い」「町民全体が悪い」「行政・国が悪い」「時代が悪い」という具体的な誰かのせいにしがちになります。しかし、社会学はそうは考えません。つまり、具体的な“犯人探し”をする学問ではないんですね。ここで少し脇にそれることをお許しいただいて、こうしてお話をする私の立場を可能にする社会学という学問の考え方について少しご紹介したいと思います。

たとえば、イラク戦争を例にとりましょう。アメリカの現政権オバマさんの前の、ブッシュ政権下で、今から約7年前、フセイン政権下でのイラクという国はテロリストをかくまっている、国際条約に違反する大量破壊兵器がたくさんある、ということで「正義の戦い」なんて位置づけられた、あの戦争ですよ。結局、アメリカが一応勝ちましたが、ところで戦争の原因となった大量破壊兵器は見つかったんでしょうか？　あれ見つからなかったですね。最終的に、当初戦争をおっはじめたときには「間違いない」といわれる根拠はどれもウソだったと、アメリカ政府がその後公式見解を出しました。世界中を巻き込んでおいてですよ！——その後、イラクが、アメリカが、世界がどうなったかは皆さんもご存知のことでしょう。

で、どうしてホワイトハウスは、あんな浅はかな決定が下すことができたのでしょうか。ホワイトハウスにいた人は、揃いも揃ってみんなアホだったから……いいえそんなことはないですね。ホワイトハウスでアメリカの政治を動かしているような人々は、一人ひとり有名大学を出て、輝

かしい実績を積んだ、メチャクチャなエリートなんです。ところが、そんな賢い人たちが集まった瞬間に、全員で急に「大量破壊兵器がある」と何の根拠もなく、子どもじみたことを言って、アホな戦争をやらかしてしまう。このとき、ホワイトハウスのなかで、一人ひとりの賢さをこえた“力学”が働いたのです。このとき、「ブッシュがアホだから」「官僚の誰某がアホだから」ではないと思います。おそらく一人ひとり是非常に有能ですから、一人ひとりに話を聞けばそれなりにまともなこと（＝「私はあの戦争には反対だった」とか）を言うでしょう。しかし問題は、ホワイトハウス全体としてアホな戦争に突入させていったメカニズムが何なのか——これが社会学の課題なんです⁽³⁾。

そういう社会学の視点で、どうして今郡上おどりはこうなってしまったのかを考えてみると、それがそういうふうに至る道筋・歴史にぶち当たるわけです。その道筋・歴史とは、皆さんがふだんから日々何気なくやってきたことの積み重ねですので、あんまり文字とかの記録には残りません。何となく身体で感じるというか、徐々に・知らん間にそうやってきたとしか言いようがないのです。しかも毎年毎年繰り返される盆踊りという娯楽だから、よけいにそうです。ですから、私は、そのような道筋を辿るために、歴史資料にあたるのではなく、地元の方々に郡上おどりの体験談を聞くという方法を選びました。

で、そこから見えてきたことは、明治期に西欧近代化の波を受けて岐阜県でも公式的に盆踊りが禁止になってから、大正12年、1923年に「郡上おどり保存会」ができて解禁になって以降、郡上おどりは3つの波をくぐりぬけて、今日に至っているということでした。その3つとは、盆踊りの、①神聖化、②観光化、③家元化です（足立、2010：118-121）。もちろんこれらは厳密に何年から何年までと年表風にまとめることはできませんし、重なったり、前後したり、同時並行的におこったりします。で、今からこの3つそれぞれをご説明するのですが、この3つの波に「保存会」がどうしても深くかかわってまいりますので、「保存会」の存在を抜きにして踊りの歴史を語ることはできません。したがって、ところどころ「保存会」の活動を中心にお話することになります。

まず①の神聖化ですが、これは先ほども申しました、明治期に公的に禁止されてから大正期に解禁になる際、「郷土芸能の復興を目指して」立ち上がった当時の「保存会」の方々が、郡上八幡の芸者さんたちの力を借りながら日本舞踊でアレンジした踊りを、警察に認めさせるための歴史上の一コマなんです。おそらく、それまで（江戸末期や明治期など）は、今のように踊りの型なんて当然ないし、酒なんか飲みながら、半分裸で、即興的に卑猥な歌を歌って踊っていたのでしょう。そんな庶民の姿を、これから西欧化・近代化を果たそうと躍起になる真面目な官僚たちからすれば、これから模範にすべき西欧人たちにはとても見せられないと感じたのでしょう。それで「土俗」という言い方で禁止にしたのですが、それを公的にもう一回認めさせるにあたって、これは「神聖な和楽です」と謳ったのです。このことは、当時の「保存会」の議事録にも残っております。

その後、終戦を迎えてやってきた波は、②の観光化です。もちろん、戦前から観光資源ではあったのですが、戦後の民謡ブームで、それは加速します。戦後すぐの娯楽に飢えた人々が大挙として郡上八幡を訪れます。そうすると、それまでの複数の輪のある、鳴り物もない踊りでは、踊り場は大混乱です。そこで、昭和28年、1953年に、「保存会」は、マイクや鳴り物が乗った屋形を導入して、一つの大きな輪に統一して、踊り手とお囃子手を分離したのです。その一方で、地元の人が好きずきで輪を作って踊っていると、「中心の大きな輪に入るように」と注意して回ったのです。これによって、それまでは、町民みんなが歌って踊れる「伝承者」だったのが、徐々に「保存会」が踊りを一手に引き受ける主体になってしまい、現在でいうお囃子方だけが声を出し、それ以外の人は「静かに踊る」原型ができあがったのです。また、観光客という初心者のために、踊りの型が統一され、地元では「ロボットが踊っているみたい」というギクシャクした踊りのもとはできあがってしまったのです。この辺りの歴史は、皆さんもよくご存知のことでしょう。

このように観光化が進みますと、「保存会」は、その重責を一手に引き受けざるをえなくなりました。いい意味で言いますと威厳や権威があるのですが、別の言い方をしますと負担が過重になってくるわけです。ですが、「保存会」という団体は、それがあたりまえ、それを良しとしてきたわけです。そうすると、そもそもは地元だけの気楽な楽しみであった盆踊りが、ヨソにも開かれた「観光資源」であると同時に「文化財」と化してしまいます。国もそのことを見逃しません。ご存知のように、国重要無形文化財にして、保存団体を「保存会」にいたします。そうするとますます、盆踊りを受け継ぐということが、師匠－弟子のような家元制・徒弟制のようなかたちになってまいります。つまり、③の家元化です。そのような家元制・徒弟制のもとで弟子入りしないと、踊りが継承できなくなっていく。これは、その道で食べていくプロの世界ならわかりますが、気楽に楽しみたいということなら、少々ハードルが高すぎると思うのです。となると、一般の町民にとって手が出しづらくなるのも無理はありません。いやそれくらいしないでどうか、とお叱りを受けるかもしれません。でも考えてみてください。郡上おどりというものは、そもそも民俗芸能なのです。みんなが「ちょっと気分もいいし、みんなの前でいっちょ踊ってやるか」というくらいの素人芸なのです。その郡上八幡という一地域のアマチュアの民俗芸能が、ヨソの人の視線を意識した、何か舞台芸術のような、あるいは、博物館の展示のような、そんなプロフェッショナルの道へと踏み込んでいったのです。

だがこれはあたりまえのことですが、なにも「保存会」は、踊りをねじ曲げるつもりでそうしたのでは決してありません。誰かが悪意を持って、あるいは、私利私欲のために、踊りを改変してきたわけではありません。忘れてはならないのは、「保存会」も、町民も、行政も、そのときどきはこれが良かれと思って突き進んだ道筋だったのです。「観光客のため」あるいは「国民全体のため」というのが、ひいては「自分たちのため」という大義名分があったからこそ、それを皆が良しとしてきたのです。しかしその反面、冒頭で述べたような「地元の踊り離れ」が期せずしておこってしまったのです。ある地元の方は、私に「もう踊りの輪には自分たちの居場所がない」

と訴えられておられました。これは切実です。つまり、これまで見てきた歴史的な流れから、そもそも自分たちの楽しみであったはずのものが、(観光客という)他人に奪われてしまい、踊り場にくつろぎを見出させなくなったということです。これはどこかおかしい、と私などは思うのです。

3. そこに住んでいる人々の楽しみを核とする

では、郡上おどりは、今後どうしていきべきなのでしょう。ここからは、私が今まで郡上八幡の皆さんからフィールドワークを通じて学ばせていただいたことを下敷きにしなが、多少「えい、やー」と突飛なことも言いますが、その点は少しお許しいたいて、今日のお題の後半にある「継承への提言」に移って参りたいと思います。

その際に重要なのは、そもそも盆踊りは何のためにあるのか？そして、郡上おどりは誰のためにあるのか？というこの講演のはじめのほうで述べた、きわめて当たり前の問いかけに立ち返ることだと思います。まず前のほうの問いかけから行きましょう。盆踊りは何のためにあるのか？もちろん、昔から言われているのは祖先供養ですね。祖先の霊がお盆に山から里に帰ってくる。それを迎え入れる。もちろんこれも大事ですね。しかし私は、それだけが目的かと疑っています。つまり、公式的には「祖先供養」にかこつけて、夜出かけてみんなで踊り遊ぶ。これが重要なんじゃないか、と私は思うんです。とくに、かつてのお嫁さんなどは、祖先供養にかこつけながら夜に出て行けたんじゃないかと思うのです。つまり、遊びや楽しみが最優先されるべきなのです。そして、日々の生活を一時でも忘れることができる、息抜きだったのです。

では、誰の遊びや楽しみが優先されるべきなのか。それは、後者の問いかけにかかわってきます。つまり、誰のための郡上おどりなのか。もちろん、地元の皆さんのため、なのです。つまり、そもそも、郡上おどりは、地元の皆さんの遊びや楽しみのためにあるものなのです。ところが、先に指摘した郡上おどりが3つの波をくぐりぬけることで、当初は観光客とともに楽しめていたものが、徐々に観光客のほう踊り場で主役になっていき、地元の人々が離れていってしまった。もちろん踊りを観光化するという発想があってもいいんですが、当初はちゃんとしたお約束があって「観光客のため」がひいては「町民全体のため」だったのが、時間の経過とともに徐々に「町民のため」がどっかにいってしまった、忘れ去られていった、ということなんです。

私は、郡上おどりの継承にあたって、今一度地元の皆さんの楽しみに向かっていきべきだと思います。これが継承の中核にすえられるべきと考えています。では、具体的にどうすべきなのか。このあたりになると、踊りイベントや日程をどうするか、踊りの技や芸をどうするか、というレベルになってきて、社会学の守備範囲を超えてしまい、提言としてもややトーンダウンしてしまうのですが、ひとつ言えるのは、皆さんが望ましいと思っている頃の、観光化以前の“昔”の踊りをヒントにする、ということです。ここでは、踊りの形態の側面について言っているのですが、

皆さんもよくご存知ですし、時間の関係上、昔の踊りの詳細については今回出版した本のほうにゆずりたいと思います。ただちょっとだけ申しますと、昔は屋形もなく、マイク・電気照明もなく、地声を張り上げて、複数の輪で、即興的な歌詞を歌いながら踊った、というものです。このあたりは、もうすでに意識的に、私がこんなことを言う前から、「八幡お囃子クラブ」の方々为中心になって「昔をどりの夕べ」を年1回催されておられますね。また、昔の踊りではないのですが、昔は踊り場に子どもたちが踊る時間帯があったということで、「子どもおどりの夕べ」が地元有志の手で2003年から催されていますね。これなどは近い過去を参照にしているわけです。私がここで申している“昔をヒントにする”というのも、この方々のお話から学ばせていただいたのです。

ただ、こうやって“昔をヒントに”といっている私の提案に対して、現代において昔に返れというのはいかにも時代錯誤、非現実で、もうすでに観光化されている今日では無茶な話だというご意見もあろうかと思えます。ですが、日本民俗学の創始者であります柳田國男は、戦前に書いた「たのしい生活」という文章のなかで、

大いに文化を改造しなければならないというのは、要するに昔あった部分をもう一遍そこを強くする、もしくは今まで用いなかった部分を沢山入れるとか、つまりは調和の仕方の変遷と考えて宜しいかと思えます（柳田、〔1941〕1970：200、ただし旧字体は新字体に改変）。

と述べています。つまり、それは昔に返れという単純なことではないのです。

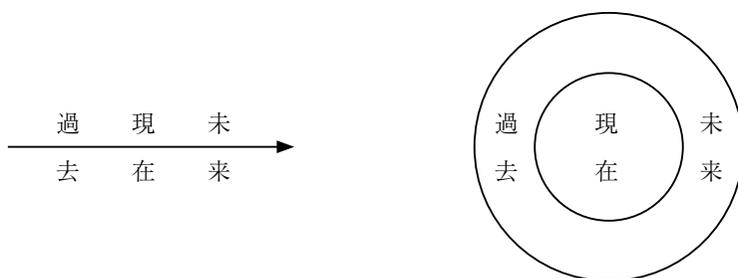


図 2つの「昔」概念（出典）井之口、1977：11

また、現代の日本民俗学の大家である井之口章次さんは、私たちがよく口にする「昔はよかった……」というときの「昔」について、たいへん面白いことをおっしゃっていて、今日の皆さんのお手元にある資料の図を見てもらいたいのですが、ふつう私たちは上の左の図のように「過去→現在→未来」と時間的に進行していき、決して後戻りすることはないと考えておりますが、その隣の図のように、井之口さんは円の真ん中に「現在」をおいて、その外側に「過去」と「未来」をいっしょにしておられます（井之口、1977：9-12）。つまり、過去を振り返ることは、この外側の円のように、未来に通じる創造的な営みなんですね。ですから、“昔をヒントする”という

のは、極めて未来に志向した継承のあり方なんです。別の言い方をしますと、継承とは、昔ながらの踊りの型を博物館のようにガラスケースに入れて厳密に「保存」していくことではないのです。それでは、生きた伝統文化にはなりません。この点から、たとえば、現在32日の公式日程にも、あるいは、踊りの時間のなかにも、「いまどきの観光客が満足しないから」とか「国重要無形民俗文化財ではなくなるから」とは言わずにいっぺん、昔風の何かを盛り込んでみるのも一つのアイデアかと考えます。

もう一つ具体的な提案としては、昔の踊りが競い合いの性格をもっておりましたので、その復活を目指すということです。あまり観光化されていなかった頃は、地元の住民を中心に、大いに競い合った。この競い合いというのは、先ほど述べました、踊りの昔の形態とかかわって、誰が音頭を取るのかわからない椅子取りゲームのような状態ですので、そこでいかに面白い歌、美しく・大きい地声を出せるかが勝負でした。そのために、私の聞き取り調査では、シーズンオフの冬に、踊り好きの人は、密かに川原で皆に知られないように声を出して練習した、というんですね。で、そんなこと知らん顔して、本番で美声を披露するというんですよ。それくらい皆さん競い合っていた。

また、踊りを主催する各地区も、自分たちの踊りを盛り立てようと、地区ごとに独自の飾り付け・作り物で競い合ったわけです。この点に関しては、現在かなり意識的に地元有志の方々が動いておられるんじゃないかと思うんですね。たとえば、本町の宗祇水神祭の日に北盛会さんがやっておられる「ゆかた姿コンテスト」や、新町の「自治会対抗コンクール」などがそうです。これら2つの催しは、どちらかといえば審査対象となるのが女性中心ですので、今度は男性のもやってみてはどうでしょうか。八幡の女性の方々が主体となって、イケメンばかりをずらっと揃えて審査するんですよ。そうすると、八幡町内・外から若い女性が集まってくる。こんなことも面白いんじゃないかと思います。

また現在、「保存会」以外の地元有志が踊りの担い手として深く継承にかかわってまいりました。それらの団体が、郡上おどりの芸・技を通じて、切磋琢磨する、よきライバルになる。これは、昔の踊りに通じるものがあると思うんです。たとえば、子どもの頃を思い浮かべていただきたいのですが、メンコならメンコ、釣りなら釣り、野球なら野球、技芸の上達には必ずよきライバルがいて、ライバルのなかで負けないために、腕を磨いてきたんだと思うのです。ですから、どんどんいろんな団体がでてきて、全体として踊りの継承を担うことは、非常にいい傾向だと思うのです。

さて、これら2つの提案は、もうすでに地元でも少しずつ取り組みがなされているように、比較的短期で、実現可能なものです。ただ忘れてはならないのは、これらの提案は、踊りの日程や踊りの一日にそれらの要素を取り入れたら、それで終わりではないのです。その先に目指すべき明確な目的があります。それは、地元の人々が踊りの輪に帰ってくることによって、老若男女を問わず、何となく集まってコミュニケーションできる場、つまり居場所ですね、これをもういっぺん

取り戻すこと、その実現に向かわなければなりません。これは、地元の若手有志「まちづくり NETWORK」の方々が、ある年の納涼祭の最後でその祭りの目的を「ほのぼのした踊りを目指して」と表現されたところに符合すると思うのです。地元の方々が楽しみ、遊び、くつろげる場をつくること、このことは、何も「まちづくり NETWORK」という団体だけでなく、今日ご紹介させていただいた各団体も、入り口こそ違いますが、つきつめて目指しているところは同じではないでしょうか。そして、そのような「地元の方々が楽しみ、遊び、くつろいでいる場」こそが、本書でも述べました盆踊りの“風情”（足立、2010：121）だと私は思うのです。それは一つひとつの歌、踊り、ふるまいにも“風情がある”わけですが、おそらくそれら一つひとつの所作やふるまいが、踊りの場全体のよい、美しい雰囲気貢献するからこそ“風情がある”んだと思うんです。私としてはこれがどうしても見てみたい。

その“風情”を取り戻す、目指す団体が一堂に会して、今年の踊り、あるいは、今後の踊りをどうしていけばいいのか、と話し合う場があってもいいのではないのでしょうか。もしかしたら、私が知らなくて、もうそういうような場があるのかもしれない。あるいは、もう毎年毎年開催される「郡上おどり運営委員会」で議論されているのかもしれない。でも、もしそうでないようでしたら、そのような話し合いの場を設けてみる。しかも、それは公式日程を調整している「郡上おどり運営委員会」の場でなされるのが一番望ましいと私は思うのですが、本日は市長さんもおみえですので、日置市長、いかがでしょうか。

4. “風情”ある踊りでのまちづくり

と、ここまでを申し上げますと、何を言っているんだ、とお叱りを受けるかもしれません。郡上市の、郡上八幡の屋台骨は観光にあるのだから、観光客という“お客様”に喜んでもらってこそ観光になるわけだから、地元の楽しみを優先することはできないし、今のままの路線で何ら問題は無いんだ、なに理想論をぶっているのか、あなたは観光を否定するのか、と。

慌てて付け加えますが、私は何も郡上おどりを活用した観光を否定するつもりはありません。ですが、これまでの観光ではない道も模索しなければならないと思っているんです。たしかに、郡上おどりは、郡上市、郡上八幡の重要な観光資源です。観光化と文化財化の両立も果たしました。ヨソで「郡上おどり」といえば、「ああ、郡上八幡の、あそこ行ってみたいんだよねー」と全国的にも有名です。

しかし少々生意気な言い方をお許しいただけるのならば、盆踊りというかたちのないものを、資源というモノのように扱うことで、今のままでの観光資源としての郡上おどりは、ある程度飽和状態にあると思うんです。ある種の限界にきている。考えてみてください。現代日本の観光というのは、マス・ツーリズムですが、交通網の発達によって、やや安っぽい言い方をすれば、基本的にはタダで見所にふれ、ちょっとしたおみやげは買いますが、ゴミだけ残して帰っていく、

大多数の“観光客”なるものを念頭においているのです。観光資源としてみた場合、郡上おどりはこれにぴったり当てはまります。そして、そのような観光客は、たいへん移り気です。テレビ番組などで知ってはじめは喰らいついていきますが、飽きてしまったら他を探します。だから、各地の観光地は、観光客を飽きさせないように必死です。その点で、郡上おどりは、大正時代から今日にいたるまで、観光客を飽きさせることなく、多くの観光客の関心をひいてまいりました。これは奇跡です。ミラクルです。それだけ踊りに魅力があるということです。また、それだけ郡上八幡の今日の「郡上八幡ブランド」を維持していくのに、皆様方の並々なぬ努力があるわけです。そのことは百も承知なのですが、それでも、本来かたちのない地元の楽しみを、観光資源としてメイクアップしてモノのように扱うというのは、いくら全国的に有名な郡上おどりであっても、いささか限界がある、無理がある、耐えられないと私などは思うのです。

それでは、観光用の踊りと地元が楽しむ踊りの2つを設けて、それらを適宜使い分ける、という行き方をしたら、どうでしょうか。つまり、一方ではマス・ツーリズムに影響された観光客のニーズに応じておいて、そのときは地元の楽しみは二の次にする、その一方では観光客を締め出して、宣伝などもせず、密かに地元だけで楽しむ、という線引きするやりかたで踊りを継承していくというものです。まるで現在の、「保存会」が主体となった約30日の公式日程と、それとは別の日に行われる「昔をどりの夕べ」のような関係ですね。このあたりのことは、わたしども研究者の世界でいう「観光文化論」に相当します。観光文化論者たちは、こう言います。

「観光化」が逃れられぬ流れなら、意識的に生活の場を「観光」の領域から区別する必要が生じる（橋本、1999：233）。

そのうえで、こうも言います。

「観光文化」は、支配的な力（つまり、観光化の波）が日常生活に容赦なく浸透してくることに対する防波堤として機能する（川森、2001：80、補足筆者）。

たしかに、現実的な路線でしょう。現に郡上おどりをめぐる状況にも似たような側面が垣間見えるわけですから。

しかし、私の立場は、この観光文化論とも異なります。観光への私の考えは、地元の楽しみ＝“風情”を中核にしなが、それを郡上おどりの夏の観光シーズンの全日程に重ね合わせるかたちでの観光開発モデルなのです。より具体的には、踊り場では地元の人々が主導権を握って、自分たちのくつろぎや楽しみ、つまりは“風情”を体感するために、踊っている。そのような地元の人々が「楽しみ、遊び、くつろぐ」ような“風情”ある光景見たさに、“通な”観光客が集ってくる。それは、これまでのマス・ツーリズムが前提としてきた“お客様”に徹底的にサービスしつつ、

いたれりつくせりの観光モデルとは一線を画すのです。どうしてこのようなことが言えるのかといえば、これまでの歴史的経緯から、もうすでに郡上八幡・郡上おどりには一定程度のリピーターやファンが多く存在すると思われるからです。そのリピーターやファン層のなかでも、より一段高次の観光モデルがあってもいいと私は思うからであります。

この観光モデルを踊りの継承の点からみていきましょう。マス・ツーリズムを前提にした今現在の観光客は、踊りの担い手にはなってくれないんですよ。ところが、ここで私が主張したい観光モデルは、地元の人が楽しんでくれば、そこにたづねられて地元の人がいっぱい、いろんな人が踊りの輪のなかに重層的に入ってくるわけですから、当然担い手はいろんなところから地元で確保される可能性をもちます。観光客に比べると、地元の人が担い手の最有力候補ですね。この最有力候補がどんどん踊りに参加して、それを観光として売る。まっ、ウリって言ったら、ちょっとヘンですけど、そういう側面を照らし出している。これは重要だと思うんですね。

また、一方このような観光開発のモデルは、“この地域をどうしていくべきなのか”という「まちづくり」にも大いにかかわってまいります。ふつう、まちづくり、あるいは、地域活性化というと、雇用の問題、経済・産業の問題、生業の問題であるととらえられてきました。そのような暗黙の前提のうえに、自分たちの身近な民俗芸能を観光資源化して、観光業その他の関連企業での雇用に拡大させて、若者の定着を図ろうというのが、一つのパターンでした。このとき、観光の存在は、“多少わがまま・きままを言うがお金を落とすしてくれれば、それでよい”というものだと思います。そこでは、“お客様”として我慢するが、その我慢する先にはお金が産み落とされる。そのときの観光客はお金をしょってきたカモ、すなわち、お金がメインなんですね。

だが、私が主張したい観光モデルからえがかれる、まちづくりとは、直接お金ではなく、人なんです。その人とは、匿名的な“お客様”ではなく、具体的な人なんです。地元の“風情”をウリにすることで、郡上が好きで郡上の生活に入り込もうとする“わかっている”観光客＝よそ者を引き寄せるだけでなく、ゆくゆくは都市部へ出て行ってしまった兄弟、子ども、孫をUターンさせる契機とならないか、という長期的な展望をもっています。おれは、私は、この風情ある郡上おどりがあるからこそ、この地を離れることはできない、ここで生きていく——そんなような希望です。

ここでまたまたそんな非現実的な……とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、ここで一つの例を紹介します。大阪府の南部に岸和田という町があります。そこは全国的に岸和田のだんじり祭りでは有名なのですが、私がかつて水泳のコーチのアルバイトをしていた頃、私より1歳年上の岸和田出身のある女性の社員さんが、だんじり祭りになると必ず会社を休むんですね。で、理由は、だんじりがあるから、と上司にも言うんですね。じゃあ、もしここで会社がそれを認めなかったら、彼女は会社を辞めるって言うんですね。むしろ、地域に帰れば、そのほうが正しい選択だと、これこそ岸和田人だ、という声がバックにあるんだと思います。ここまでいけばスゴイですが、おそらくこのような若者たちが、祭りという伝統の担い手になるだけでなく、

そのまちを背負って立つ人材にもなっていく。つまり、そもそも伝統文化が寄せ集めるものとは、お金よりも、人材なんです。しかも、その人材は、どんな人でもいいカネさえ落としてくれればいい、匿名の人ではなくて、このまちをどうにかしようと責任をもち、知恵を出す可能性を秘めた人、つまりは地元の若者なんです。

さて、ここまで述べたうえで、この講演の冒頭で述べた、私どもの学生の「ショックですう」というあのリアクションに再度立ち返ってみましょう。なぜ彼女はショックだったのか？ それは、単なる旅番組の見すぎではないと思います。どうしてかといえば、郡上おどりの本場で、地元の人々が主導権を握りながら「楽しみ、遊び、くつろぐ」そんな風情ある雰囲気を感じたかったからではないでしょうか。そして、そんな雰囲気をよそ者として損ねることなく大切にしながら、ちょっとお邪魔させてもらいつつ、地元の方々と交わりたかったからではないでしょうか。彼女のショックを「テレビの見すぎ」と一蹴してしまわないで、彼女のショックから、われわれは、いろんなことが学べるわけなんです。

5. 高信頼社会の強み

さて現在、地域社会を取り巻く状況には、たいへん厳しいものがございます。2008年秋のリーマンショック以降、景気はよくなりません。また少子高齢化の波も深刻です。郡上八幡も例外ではないでしょう。私がこの町に来始めた頃に比べ、市街地にずいぶん空き地や空き家、シャッターが目立ってまいりました。

しかし、郡上八幡、郡上市に関しては、“郡上八幡らしさ”を失わなければ、必ずこの厳しい状況をきつと乗り切ることができると思っています。では、“郡上八幡らしさ”とは何か？ それはもちろん、水・踊りがあげられますでしょうが、私はそれらを清く、風情あるものにしていく根元の人情というか人間関係だと思っています。郡上八幡は、他所に比べ、きわめて高信頼社会であります。たとえば、家に鍵をかけなくても、泥棒に入られないのです。セコムしなくてもいいわけです。こんな地域、どこにあるのでしょうか。都会なら昼間、家に人がいてもそうはいきません。この信頼に裏づけられた人間関係は、人を疑って生きるのに比べると、それだけ大きな利得なのです。常に人が信じられる状況にあることで、様々な困難に皆で対処できるわけです。集合行動が容易になるのです。社会学者は、この信頼からの利得が、まるで資本のようだというところで、「ソーシャル・キャピタル」、つまり「社会関係資本」⁽⁴⁾と呼び、注目しております。都市ではこれを回復することが急務だと言われてはいますが、なかなかです。それに比べ、郡上八幡の場合、もうすでに維持されている。この絆の強さ、人を信頼できる関係、高信頼社会こそが、郡上八幡の特長なのです。どうかこれをこれまで同様大切にしていきたい。それが皆さんの“ちから”になるのです。

私自身、この郡上八幡の特長を前提に、今回の郡上おどりの継承への提案もお話させていただ

きましたし、現在目下のところ、高信頼社会ということで、頼母子に注目し、研究を進めております。そういった意味で、今回の出版はひとつの区切りであって、私の郡上八幡研究はまだまだ続きます。また、いつものスタイルでお話をお伺いすることがあるかもしれませんが、その節は、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

最後になりましたが、これまで約20年間にわたって調査研究にご協力くださった皆様、本当にありがとうございました。また、本日このようなすばらしい機会を設けていただいた発起人の方々をはじめスタッフの皆様、また、お忙しいご公務の合間をぬってご参集いただいた日置市長をはじめ郡上市役所の皆様、八幡お囃子クラブの皆様、郡上おどり運営委員会の皆様、郡上おどり保存会の皆様、郡上八幡観光協会、産業振興公社の皆様、会場である流響の里の皆様、門講二十歳会の皆様、そして今日こうしてお忙しいなかお集まり講演をお聴きくださった皆様、本当にありがとうございました。ただただ感謝するばかりです。

最後に、皆様のご健康とご多幸、ならびに郡上八幡のますますのご発展を祈念しつつ、この講演を終えたいと思います。本日は、ご静聴いただき、本当にありがとうございました。

註

- (1) 本稿は、講演内容をまとめたものですので、一語一句書き起こしたものではありませんことをお断りしておきます。なお、当日の公演の様子は、地元のケーブルテレビである「インフォメーション・ネットワーク・郡上八幡」にて「郡上おどりについて」というタイトルで放映されました（2010年12月1、2、7、10、14、17、20、27日）。
- (2) これは、前任校の授業でいう「社会調査実習」を指しています。
- (3) 念のため申しますが、これだけが社会学の考え方ではありません。
- (4) 社会関係資本については、パットナム（Putnam、2000=2006）を参考にしました。

参考文献

- 足立重和、2010、『郡上八幡 伝統を生きる——地域社会の語りとりアリティ』新曜社。
- 橋本和也、1999、『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』世界思想社。
- 井之口章次、1977、『伝承と創造——民俗学の眼』弘文堂。
- 川森博司、2001、「現代日本における観光と地域社会——ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』66-1：68-86。
- Putnam, Robert D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. =2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。
- 柳田國男、〔1941〕1970、「たのしい生活」『定本柳田國男集 第三十巻』筑摩書房：187-202。